

Title	イリヤ・カバコフ作品研究 : 物語性をめぐる考察
Author(s)	藤田, 瑞穂
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59373
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

本論文は、イリヤ・カバコフ(1933～)作品における物語性を指摘し、その主題と手法がソビエトで絵本挿画を書いていた初期の活動から一貫していることを明らかにしようとするものである。

第1章「絵本挿画と〈アルバム〉」は、カバコフが1957年から1987年まで、絵本挿画の仕事に従事してきたことをとりあげる。同時代に制作されたアルバムと挿絵には、白が共通しているが、アルバムにおける白は鑑賞者のまなざしを引き込む装置となった点が特異であると述べる。

第2章「2つの『十の人物』」では、ソビエトから西側へとその制作活動の拠点を移したカバコフによるアルバムからトータル・インスタレーションへの変化が扱われる。そこでは神秘的な世界としての白に代わって、平凡な灰色の生を象徴するゴミが主調となっていることが指摘される。

第3章「〈ゴミ〉と〈コレクション〉」では、カバコフ作品において蒐集されたゴミが鑑賞者の記憶を呼び起こす点で、鑑賞者もまた美術館の中に蒐集されるオブジェとして機能することが述べられる。

第4章「〈トータル・インスタレーション〉と美術館」は、架空の画家の回顧展『シャルル・ローゼンタールの人生と創造』(1999)をとりあげ、この展覧会が美術館そのものを作品とする点で、第3章におけるゴミと同様に批評的な試みであることが指摘される。

第5章「イリヤ・カバコフ作品と〈白〉— “An Alternative History of Art: Rosenthal, Kabakov, Spivak” を手がかりとして」では、白をめぐる試行錯誤が連続してみられるゆえに、それがカバコフ自身の歴史の書き直しであったことが示唆される。

第6章「イメージとテキスト — 通奏低音としての」では、これまでみてきたイメージとテキストの融合が『棚田』(2000)においても共通することが述べられる。絵本の挿絵制作における編集者の視点が、トータル・インスタレーションを経て、田園風景とその土地の厳しい現実とを切り結ぶ地点まで一貫している可能性が示唆されて結論づけられる。

論文審査の結果の要旨

ソビエト時代の絵本の挿絵から2000年の「棚田」プロジェクトまでのカバコフの多様な作品を、豊富な挿絵と引用を織り交ぜながら131ページ(400字換算約300枚)にわたってとりあげ、イメージとテキストを切り結ぶ挿絵画家としての批評性と一貫性を読み込もうとする試みは評価できる。

しかしながら、カバコフの作品に注目するあまり、それらを大きな文脈で位置づけられていない点について多くの批判が寄せられた。カバコフと同工異曲の試みを行っている比較すべき芸術家や作家が参照されず、美術批評や美術史のなかでの受容や位置づけもおよ

【25】

氏名	藤 田 瑞 穂
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 25333 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	イリヤ・カバコフ作品研究 — 物語性をめぐる考察 —
論文審査委員	(主査) 准教授 橋本 順光 (副査) 教授 清水 康次 教授 中 直一 京都市立芸術大学准教授 加須屋明子

そ十分であるとは言い難い。誰がどこでなにを美術として鑑賞するのかというカバコフの問いは、移住にともなう記憶の想起や表象の問題として広く現代においては共有されているだけに、独自性や特異性の説明が不十分であることは惜まれる。

作品分析についても、手法および分析についていくつか疑義が呈された。作品に付せられたテキストの引用が自身で翻訳したものではないこと、しかもその分析がイメージ分析と相乗効果を生んでいない点については厳しい批判が寄せられた。白と余白の相違点など、原語に即した概念の定義が不十分なまま不用意に括弧を頻用し、ふまえるべき出典や論証が不十分であったことも否めない。

とはいうものの、ソビエト時代の初期の挿絵から、ゴミや架空の作家展をめぐるトータル・インスタレーションそして『柵田』まで、ロシア、アメリカ、日本と場所までも異にしながら繰り広げられる多様なイリヤ・カバコフの作品群を、絵本における絵と文の関係の変奏という観点から一貫性を指摘しようという作業は、今後の展開を期待させるものであり、イメージとテキストのさらなる緻密な分析と共に、この試論が『柵田』以後のカバコフの創作活動によってどのように洗練され、あるいは修正されるのかについては、審査員一同一致して関心が寄せられた。以上のことを鑑み、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。